大分県現代俳句協会会報

第133号

令和7年4月25日

写真と文：足立　攝

現代俳句歳時記　【桜・染井吉野】

お花見はもともと中国伝来の梅見だったが、平安時代に桜に移行した。江戸後期の染井村の植木職人が「染井吉野」を交配して爆発的に広まった。自然界では存在できないクローンゆえの儚さがある。

花びらは街へ流れる夜の墓域　　**成清 正之**

10・25＝九州現代俳句大会の成功を！

第35回定期総会 全議案を議決

2月24日、大分市ホルトホールで大分県現代俳句協会の第35回定期総会が開催されました。暖冬の続く中で、この日は県の西部と北部で大雪になったところがあり、出席ができなくなった会員がいました。

総会は河野則子副会長の開会の言葉のあと、有村王志会長の挨拶があり、議事の議長に田代直之幹事を選出しました。今年度活動計画の最重要課題は10月25日（土）に十年ぶりに大分が当番県となる「第15回九州現代俳句大会」を成功させることであり、そのために第35回大分県現代俳句大会の時期を移行し、同大会と同時開催することが議決されました。

九州現代俳句大会の会場は大分駅上野口のホルトホール大分で13時の開会です。大会には会員以外でも参加できます。会員のみなさんには10月25日の予定を今から入れていただくことを呼びかけます。

このあと総会は年間一句賞および大分県現代俳句協会賞の発表と顕彰を行い閉会しました。全員で昼食の後は懇親俳句大会を行いました。

第35回定期総会年間一句賞3作品の発表

《河野輝暉顧問推薦》

あの実は…の次が言えずに剥く蜜柑

稲田久美子

人は口に出た言葉だけが言葉ではない。言いかけた語の片々も有意である。喜や哀を問わず「謂ひ応せて何かある」とは芭蕉が内心で激怒した高弟への危惧だったと。言い尽くさないことによって逆に無限の事をいう。言語学での術語ノンバーバル・ランゲッジであろう。西洋民族は言いたいことを全部言い尽くす。一方、日本人はそれを、お転婆娘、口減らず、立て板に水、一言居士などと蔑視する民族傾向がある。これらは同時に俳句の真髄でもある。

掲句は、言い淀む事によって、故意ではないにせよ、言ってしまった以上に、相手に気を持たせる全情たっぷりだ。上五の口語のイントロに対比し、下五の「蜜柑」の止めが奏功。

同種の作品に「言い返す言葉飲み込み蜜柑むく」（本田圭子）、「十三夜言い負けること覚えたり」（林香澄）、「自己主張してもいいのよ冬苺」（井上則子）、「年寄りに学ぶ事無し落ち椿」（河野輝暉）

《有村王志会長推薦》

母泣かすはずじゃなかった枇杷の花

足立　町子

親兄弟、とりわけ、両親、なかでも作者が女性であることから、母親への思いが深く存在する。かって母へ言った言葉が何か琴線にふれる想いをさせてしまった後悔の念があったのであろう。その内容は知るすべはないが、また、確執の原因は枇杷とは全く無関係と考えている。恐らく実家に枇杷の木があり、その黄色の鮮やかな形を眺めていたことは想像できる。この句を推薦したのは、この枇杷の花である。鮮やかな黄色は兜太のいう絵画性、絵心を彷彿とさせられる。

《河野則子副会長推薦》

うどんにも優等生の寒卵

竹下美津子

先ず気負いのない、定型に添った、わかりやすく仕上っているこの句に心が止まりました。

昔は卵と言えば滋養のある食べ物で、戦中戦後の食料難の頃は、一番の御馳走でした。飽食の現代でも寒卵と言えば、他に劣らぬ、食材の一つです。一般に卵は幸福感を膨らませます。

うどんの主役を追越し、寒卵が優等生の座へと登ったところに俳句の醍醐味を味いました。

【総会で承認された役員補充 等】

《役職辞退》※全員本人の申し出

・谷川彰啓（顧問）一般会員に
・万葉太郎（顧問）退会
・瀬川剛一（副会長）一般会員に
・井元扇岳（幹事）退会
・久枝花城（監事）一般会員に

《補充人事》

・牧野桂一（大分）顧問に
・立花眞由美（豊後高田）幹事に
・天田泉美（宇佐）幹事に

《担当補充》

・牧野桂一　年間一句賞選者
・足立　攝　協会賞選考委員

【寄贈書籍紹介】

当協会協会賞選者で、熊本県現代俳句協会副会長の中山宙虫さんが代表を務める霏霏Ⅱの17号（冬号）、18号（春号）がそれぞれ1月1日、4月1日付けで発行されました。頒布価格は一冊二〇〇円（税込み）。

星永文夫氏の「霏霏」の後継誌としてスタートして以来、毎回進化をとげ、今では宙虫さん色がしっかり濃くなっています。自薦作品のほか、句評、評論、エッセーなど。

竜胆のかがやく風の捨て台詞
彗星と会えない夜長穴を掘る
美術館に入るためらい枇杷の花
水仙が時間を止めるときひとり

（宙虫氏作・事務局抄出）

第二回雑詠句会＝結果発表＝

人生の端に来ていて寒の月
〈17点〉有村　王志

うかつにも潤目鰯と目を合わす
〈14点〉小野みち子

産み立ての卵の温み終戦日
〈13点〉宮川三保子

言い返す言葉飲み込み蜜柑むく
〈13点〉本田　圭子

ひらがなで語る八月青い空
〈13点〉赤峯　友子

十三夜言い負けること覚えたり
〈12点〉林　香澄

天高し消してはならぬ好奇心
〈12点〉時松由美子

片陰や吾の一歩と母の二歩
〈12点〉時松由美子

夜学子や母が背を押すにぎりめし
〈11点〉豊國　隆信

点滴の落ちる速さで秋になる
〈11点〉吉田　素子

《10点》

柿落葉掃けばふるさと空っぽに
足立　町子

後悔を奥歯で潰し夏の雲
鎌倉真由美

《9点》

弾薬庫睨む背高泡立草
佐藤　優美

八月の父いつもより気難し
白土　正江

納得の胸にストンと心太
赤嶺　広史

緑陰に言葉生まれるまで座る
川西　達子

敗戦忌生きてる者は爪を切る
神　慶子

老いてなお生きる気力の稲を刈る
御手洗豊海

《8点》

秋立つや虚子の顔して土手に座す
髙橋　玲子

妻となり母となり果て草の花
鎌倉真由美

花サフラン嬉しい時に出る涙
古後　粒勝

美しきひかりの殺意蜘蛛の糸
髙橋　玲子

弁当の輪ゴムを飛ばす夏の果
牧野　桂一

入道雲ゴジラの曲で登場す
岡村　君香

しんしんとこの世の端に老いて雪
有村　王志

叱られて見た夕焼けの赤い舌
足立　攝

だんだんと透きとおっていく秋の耳
小野みち子

来し方を西日の中に置いて来る
上田たかし

名月や言葉少なの夫といる
有永真理子

《7点》

また一つ更地の増えし墓参かな
松廣　李子

「かあさん」の声にふりむく秋彼岸
有永真理子

朝顔や今日だけの顔競い合ふ
豊國　隆信

青栗や少年いつも伏し目がち
井上　則子

埋もれし骨片の哭く原爆忌
立花眞由美

水打つも昨日も今日も人の来ず
佐藤　律子

※以下は句会報27号参照

第27回（2024年）大分県現代俳句協会賞

順位	募番	タイトル	作　　者	有村王志	河野輝暉	田たか	伊藤利恵	河野則子	中山宙虫	計	授賞案
1	4	冬薔薇	神　　慶子	5	5	2	1	5	1	19	協会賞
1	14	なまえ	赤峯　友子	4		5	5		5	19	協会賞
3	6	隠し上手	本田　圭子	3	3	4	2	4		16	準　賞
3	8	そこは過去	小野みち子		4	2	4	3	3	16	準　賞
5	13	星月夜	髙橋　玲子		2				4	6	奨励賞
6	7	独り居	川西　達子	2			3			5	奨励賞

第27回 大分県現代俳句協会賞

神　慶子氏「冬薔薇」・赤峯友子氏「なまえ」

準賞に本田圭子氏「隠し上手」・小野みち子氏「そこは過去」

第27回大分県現代俳句協会賞には、十四名の応募がありました。「年間の自作20句」というだけが大きな縛りで、後は既発表でも未発表でも自由、他の大会で入賞した作品でも可という、とても緩い応募規定の協会賞ですが、それだけに難しいこともあるようです。

まず「20句1組にタイトルを付けよ」の規定では、応募作家の総合力が問われます。一句一句を花にたとえれば、この賞は一本一本の花の良し悪しだけでなく、《花束》としての出来映えも審査するものだからです。退職祝い、結婚式、出産祝い、病気お見舞い……というようにシーンによって花の選び方は変わってきます。このシーンに当たるのが協会賞の場合はタイトルです。地味な色調の法事用の花束の中に、豪華な紅い薔薇が一本交じっているだけで雰囲気が台無しになります。

さらに言えば、花束では色のコーディネイトや、全体のコンセプトが問題になります。主役になる花を引き立てるためには、かすみ草の様な地味な花の斡旋も必要になるでしょう。「全体の見栄えも大切、一本一本の花の出来も大切」とは、こういうことです。

よその大会ではタイトル付けが形骸的になっているところがあり、作品の中の気に入った季語をそのままタイトルにすることも多いようです。当協会の選考規定には「一句一句の出来映えだけでなく、タイトルを含む作品全体の完成度」を考慮することが銘記されています。そのため、どこかで入賞した作品を集めても、当協会では通用しないばかりか、逆効果になることもあります。

さらに今日性の問題があります。明治から戦後くらいの耽美的な世界観が好きな選者もいれば、作品の深部に現代の精神が感じられることを大切にする選者もいます。実力差が歴然とある場合は問題にならなくとも、拮抗した場合はわずかな差が明暗を分けることになります。

さて、今回27回協会賞の応募者14名のうち、現在の執行部体制になった28回総会以降に入会した新会員は12人でした。このことからも会員獲得運動をしたおかげで、いま協会が存続していることが見て取れます。

今回は1位～4位が拮抗し、この4作品に得点の78パーセントが投ぜられました。残りの10作品で得点の22パーセントを分ける形です。それほど顕著な実力差があったわけではないのに、選者の好みがきれいに分かれました。こんなことがいつも起こるわけではなく、全くの偶然です。今回得点が入らなかった作品が、例年のレベルより落ちるということでは決してありませんので自信をなくさず再チャレンジしてください。

今回は19点が2作品あり、どちらも2人の選者が最高点の5点を入れているため、協会賞はすんなりと2組同時受賞ということに決まりました。また、わずか3点差の16点に2作品があるので、これを準賞としました。敢闘賞は2作品です。

第27回大分県現代俳句協会賞

＝受賞作品＝

『冬薔薇』

神　慶子

どの家も春が来ていて忙しい
春寒を胎児のように丸く寝る
若き日をめくるアルバム花ざくろ
帰り道ふっと淋しくなって春
捨てきれぬちびた鉛筆一葉忌
冬芒みなもの想う形して
女優のような遺影に拍手夜の梅
淋しさのその先にある桃の花
春はあけぼのきりきりと蟬子を巻く
葡萄食む夜の一角を崩すため
長いながい手紙ください冬薔薇
満たされているから淋し夏の月
ハンガーに掛けっ放しの春愁
すれ違う車は陽気聖五月
痩せた手で九月の痩せた蚊を叩く
牛は屠場へ夏うぐいすのよく鳴く日
敗戦忌生きている者爪を切る
好きに生き好きに死にたい草の花
砂場にはステゴサウルス星月夜
鳥渡る母の着物を手放せば

『なまえ』

赤峯　友子

ジグザグに麦秋をくる父の風
天牛が夢の途中を横切れり
じゃんけんで負けた蛍がついて来る
送り火や父をかえして後の熾
踊りの輪ゆるりゆるりと夏がゆく
ひらがなで語る八月青い空
八月の鴉の背中泣いている
煙突の夏空われに落ちて来る
逝く空を毀さぬように青栗蹴る
今生の奥へ奥へと木の実落つ
冬空に鳶の一笛無重力
バックミラーの冬夕焼けが遠ざかる
何もかも地獄蒸しして女正月
風邪に寝て前頭葉の海鳴りす
蛇穴を出て本能にぶつかれり
石榴花の重たい空が透きとおる
菜の花の群れて恐るるもののなし
たんぽぽの絮の行方はぽるとがる
木花咲耶姫（このはなさくや）が舞い降りてより青田
名を呼ばれわが名が好きになる小春

《受賞の言葉》

神　慶子

この度は第27回大分県現代俳句協会賞を戴きましたこと、選者の諸先生に心より御礼申し上げます。私と致しましては、思いもかけずこの様な大きな賞を戴き戸惑いを隠せません。これも一重に足立攝先生の御指導の賜と感謝致しております。

今から七年前に、近くの富士見が丘公民館の足立先生の俳句教室に誘われて入会してのが、私の俳句を始めるきっかけとなりました。俳句なら年老いて、たとえベッドの上にいても出来る趣味ではないかとの思いもありました。

最初は先生の指導に戸惑う場面もありましたが、丁寧で辛抱強い教えのお陰で、段々と表現する事の楽しさを覚える様になりました。

また、大分県現代俳句協会という伝統ある協会に入会出来た事も大きな励みとなりました。多くの諸先輩の俳句を、年三回の雑詠俳句会（通信俳句会）で目にして学ぶ事が出来る上に、勉強会や懇親句会と、多くのお仲間と接する機会も刺激となりました。俳句の世界の広がりを、実感でき大変有難く思っています。俳句は机に座らずとも、お茶碗を洗いながら、心に浮かぶ様々な事を整理して詠めるのが、とても毎日の生活に張合いを与えてくれます。これまでの自分の句を振り返って見ますと、一つひとつがその時の風景、場面、心情を思い出してくれます。

長い目で見れば自分史の様なものに成り得るのではないかと思います。いつの日か、句集が一冊出来たらいいなと思っています。将来は子どもたちや四人の孫娘たちが私の句に目を通してくれるのが夢です。その為にも、これからも自分らしい句を詠み続けていきたいと思います。

《受賞の言葉》

赤峯　友子

大分県現代俳句協会賞という権威ある大きな賞をいただいてありがとうございました。まだ実力がないのにこんな

評価をいただいていいのだろうかと、喜びよりも不安の気持ちでいっぱいです。選考委員の先生方に心からお礼を申し上げます。

また私を支えてくれた川添俳句教室の仲間のみなさんや大分句会のみなさん、所属している結社誌『麦』のみなさん、そのほか県内外の諸先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

私が俳句を始めたのは、平成20年9月のことです。父、成清正之が川添公民館で開講した「川添俳句教室」の教室生兼事務局として参加したのがきっかけでした。父が俳句をライフワークとしていたこと、現代俳句協会の会長（当時）だったことは知っていましたが、俳句がどんなものであるかということは深く考えることがありませんでした。

最初は自分の気持ちが17音で表せるし、そのための書き方を学びわくわくしました。ただ当時は仕事が忙しく、父も元気だったので、その内に父に何でも聞けると安心して、それほど熱心に俳句に打ち込んでは来ませんでした。令和4年に父が他界し、事務局として父の事業を私が受け継ぐことになって、なんであの時もっと熱心にやらなかったのか、もっと詳しく父に聞いておかなかったのかと後悔しています。

今回の受賞を亡くなった父に報告し、この賞に恥じないように頑張っていくことを父に誓いました。授賞を父も喜んでくれていると思います。一生懸命努力していきたいと思いますので、変わらないご指導をよろしくお願いします。

《第27回協会賞 準賞》

「隠し上手」　本田 圭子

正義から始まるいくさ冬の雲
菜の花の沖を彷徨う鮫の夢
渾身のライスカレーや父の春
春昼を母につながれ黒電話
金平糖一かけほどの虫の闇
花八つ手隠し上手は見せ上手

《第27回協会賞 準賞》

「そこは過去」　小野みち子

姉が来て時雨の中に立っている
冬の旅ふるさとに似た駅に着く
種を蒔くときの指先から老いる
だんだんと遠のいてゆく秋の耳
マロングラッセ一粒分の秋の恋
山茶花の垣根越えたらそこは過去

第27回大分県現代俳句協会賞・各選考委員選評

事務局に届いた選考結果と選評を発表します。選考の際は作者名は伏せてありますので、左記選評中の作者名は、あとから事務局で書き加えたものです。中山宙虫氏は選評を休みました。

パラドキシカルな意外性　河野 輝暉

1位「冬薔薇」神 慶子 5点

先ず題名に緊張感と明るさがあり「冬来たりなば春遠からじ」のフレーズを喚起する。「春はあけぼの…」でイントロを飾って古典「枕の草子」を演出し読書の深さを思わせる。すると出だしの一句「どの家も春が来ていて忙しい」と一見凡句と思いたいが、或る作家の名言「難しい事をやさしく面白く」はこのことかと内省させられる。全句に渡り凡語使用の日常から決して離脱してない情念の高揚が素晴らしい。その例として

淋しさのその先にある桃の花
満たされているから淋し夏の月
好きに生き好きに死にたい草の花
鳥渡る母の着物を手放せば
牛は屠場へ夏うぐいすのよく鳴く日

掲句はパラドキシカルな意外性が効いて楽しませてくれる。日常が詩である、と確信した。

2位「そこは過去」小野みち子4点

全句の体質は1位の「冬薔薇」と酷似している。各句は6句を除き皆佳句であるが、唸らせる句は無かった。惜しい事だが、これだけの合格点を基盤に、自信を以て精進すれば伸び代は大。目に留めた佳句

種を蒔くときの指先から老いる
マロングラッセ一粒分の秋の恋
はにかんだ目をした父よ父の日よ
山茶花の垣根越えたらそこは過去

3位「隠し上手」本田圭子 3点

個性的な秀句が散見されて全句を見飽きない佳さがある。例えば

正義から始まるいくさ冬の雲
春昼を母につながれ黒電話
蝸牛ふっと家出がしたくなる
渾身のライスカレーや父の春

右の様なレベルの作品がもう少し欲しい。玉石混交の残念さがある。多作をした後、大切な事は選句作業を慎重にすることである。

4位「星月夜」髙橋玲子2点

均めて全句がよく整っていて、欠点が無いことには自信を持つことをお勧めする。やや物足りないのは軽妙にまとまり過ぎて、デジャブー感（既視感）が多く見られる。上手なので却って見る者を感動させない。短詩の故か、ああ言えばこう言う、という両論がたたかわせられる事がよくある。その点、指導者の指摘を参考にし、当協会の同好の士のデスカッションを句会、勉強会、協会報への積極的な発表や、他句鑑賞文を投稿するなどして前進することを心より期待する。拙者の推薦句

愛されて疎まれて母野水仙
わだかまり捨てて桜になってみる
秋立つや虚子の顔して土手に座す
秋まつり騒めきだけを持ち帰る
朝涼や音たててとく玉子二個

5位「京都」薬師寺裕一 1点

何しろ古都京都にスポットを当てているからアナグロニズムに読む者も陥る。観光地という狭い世界と、「昭和は遠くなりにけり」の句よりもまだ昔の既知の世界を見せることになる。この展示については賛否両論あろうが、今回の協会賞の性質上、片寄りの無い方がよいのでは。各句はほぼ良くまとまっていて俳句眼は完成しているので、名句を沢山読み、立ちどまって詩想を高めれば結構。

次に注目した佳句を。後の二句には感心した。

竹藪の樹間あかるし烏瓜
秋風と影ふかくなる舞妓かな
重い海さめざめと暮れ能登の秋
石仏の首の継ぎ目も小六月

秀句が多く順位づけに苦慮　有村　王志

今回の作品は秀句が多く、順位づけに苦慮しました。点数も苦心しましたが以下の通りにしております。

1位「冬薔薇」神　慶子 5点

春寒を胎児のように丸く寝る
冬芒みなもの想う形して
長いながい手紙ください冬薔薇
ハンガーに掛けっ放しの春愁
敗戦忌生きている者爪を切る

一句目は胎児という表現が生きている。二句目の「みなもの想う」の内包する形が上手く表現されている。

2位「なまえ」赤峯友子 4点

じゃんけんで負けた螢がついて来る
今生の奥へ奥へと木の実落つ
蛇穴を出て本能にぶつかれり
菜の花の群れて恐るるもののなし
名を呼ばれ我が名が好きになる小春

それぞれに自在な発想があり一句目などはなかなか思付かない詩想三句目の本能と言う措辞はまさにそのものと言う発想があり、作者の力強さが窺える。

3位「隠し上手」本田圭子 3点

眠りより覚めた山茶花から風に
われら老年人待ち顔のチューリップ
春昼を母につながれ黒電話
もがいても風になれない花茨
蝸牛ふっと家出がしたくなる

一句目は発想が面白く心改まる思いがある。二句目のチューリップの形象が魅力。三句目は黒電話の存在が際立っている。四句目はやはり、素材その詩想がいい。

4位「独り居」川西達子 2点

むかご蔓引けばぽろぽろ今日も晴れ
晩節や確と生きたし藪椿
恙なきひと日の終り万の薔薇
コスモスはやっぱり揺れたい花なのね

一句目は今日も晴れに展開の意外さがある。二句目のしっかりとした展開。四句目の柔らかい詩情の展開など。

5位「まるい汽笛」有永真理子1点

身の丈で祝う初春老暮し
身の内のすべて曝して冬木立
春の山樹々それぞれの息づかい
心身のきしむ音する木の芽どき
秋空をまるい汽笛が抜けてゆく

二句目の冬木立に屹立した作者の感覚が活かされている。三句目と四句目は同質の作品だが作者の心音が伝わる。

そのほか応募作品別に好きな作品を挙げておきます。

「日々是好日」
夜も明けば田草取るなり物言わで

咳き込むは我が魂の叫びかな

「道程」
青い空でてふてふ遊ぶ飛び笑ふ
梅雨の夕こんにゃく暗き匂いして
八月や手に千代紙の鶴のせて
オブラート一枚剥がす去年今年

「回想」
夕暮れの心寂しき赤トンボ
ラッキョウのこりこり感かたまらない
甘酒を心で作る出来具合

「京都」
八月のいろよみがえる終戦日
母なれや門火の影の虫の声
重い海さめざめと暮れ能登の秋

「そこは過去」
姉が来て時雨の中に立っている
万緑のまん中にいる意気地無し
山茶花の垣根こえたらそこは過去

「まるい汽笛」
身の内のすべて曝して冬木立
心身のきしむ音する木の芽どき
春キャベツそのシャキシャキが売出し中

「塩むすび」
妖怪は君の横にも去年今年
ヒアシンス平気な顔で嘘をつく
麦秋のまだどん底を抜けられぬ

「ねぎぼうず」
夢を見ていられる時間曼珠沙華
安らぎの形に座る鏡餅
吹き曝す能登のこのわた売り何処

「青柿」
臥龍梅父は無骨を押し通す
未練などさらさらなくて花吹雪
さくさくと踏めば愛しや夏落葉

「星月夜」
わだかまり捨てて桜になっている
口中の渇き今なお原爆忌
美しい殺意のひかり蜘蛛の糸

日常の生活の中に詩がある　上田たかし

今回の応募作品14組は発展途上の協会にとってちょうどよいくらいの数ではないだろうか。それぞれに工夫があり、大変読み応えがあった。ただ誤表記や季重なりなどが気になった作品もある。一律に季語の重複を嫌うものではないが、よほど明確な意図がない限り応募作品では避けた方がよい。まして一作品に複数の季重なり句があれば、採用する選者は少ないだろう。こうした失敗は自分では気づきにくいので、日頃から他者の意見を聞く習慣をもってほしい。

さて、今回は意欲的な作品が多く、順位付けに苦労した。1位、2位をまず決めて、他は大きな差が見られなかったので3作品を同列の3位にした。

1位「なまえ」赤峯友子　5点

生活の一端が上手に読み込まれており、読者の共感を呼ぶ。視点のシャープさを強調しすぎないところに魅力を感じた。

ジグザグに麦秋をくる父の風
じゃんけんで負けた蛍がついて来る
ひらがなで語る八月青い空
今生の奥へ奥へと木の実落つ
風邪に寝て前頭葉の海鳴りす

2位「隠し上手」本田圭子　4点

日々の生活の中での葛藤を上手に表現して、読者の心をとらえている。穏やかな表現が魅力である。

菜の花の沖を彷徨う鮫の夢
春昼を母につながれ黒電話
もがいても風になれない花筏
蝸牛ふっと家出がしたくなる
団栗や老年にある反抗期

3位「そこは過去」小野みち子2点

四季を通しての生活が巧みに示されて、共感を呼んでいる。視点が面白いし、且つ鋭い。

逆さまの冬の金魚と目を合わす
万緑のまん中にいる意気地無し
種を蒔くときの指先から老いる
だんだんと遠のいてゆく秋の耳
山茶花の垣根こえたらそこは過去

3位「まるい汽笛」有永真理子2点

表現しようという意欲に好感が持てる。推敲と自選を丁寧にすればさらにバラつき感がなくなる。

身の内をすべて曝して冬木立
春の山樹々それぞれの息づかい
心身のきしむ音する木の芽どき
秋空をまるい汽笛が抜けてゆく

3位「冬薔薇」神　慶子　2点

視点にすばらしいものがある。表現をまだまだ研ぎ澄ませてほしい。大きな可能性を感じた。

春寒を胎児のように丸く寝る
満たされているから淋し夏の月
ハンガーに掛けっ放しの春愁
敗戦忌生きている者爪を切る

瞬時の動きを上手く捉える　河野　則子

1位「冬薔薇」神　慶子　5点

痩せた手で九月の痩せた蚊を叩く

作者も夏痩せをし、同じく痩せた蚊に同情しつつも、害虫の蚊を叩くところがどこか諧謔味があって瞬時の動きを上手く捉えている。

牛は屠場へ夏うぐいすのよく鳴く日

昔から「烏が鳴くと人が死ぬ」がよく言われているのを下敷きにしている。今、耳にしている鶯の麗しい声は残虐性のある屠殺場と重なっている。そんな皮肉を捕らえているところが即興吟として秀句と思う

敗戦忌生きている者爪を切る

爪を切る動作は、「出爪を切るな」とか「夜爪を切るな」とか昔の諺を上手に折り込んでいる。自分の現在の生活を無批判に丸飲みしていないところに魅かれた。

2位「隠し上手」本田圭子　4点

正義から始まるいくさ冬の雲

戦さは、相方が大義名分を作ってどんどん深味にはまっていく。両者がなかなか一歩引かずに長引く。冬の雲の冷たさでうまく表現している。

千年を隠れんぼする春の鬼

日常は鬼が隠れんぼしているごとく淋しい山の中が芽吹きの春と共に祭りでにぎわう様子がよく描かれている。

蝸牛ふっと家出がしたくなる

なめくじの自由さと違い、家を背負っている蝸牛の束縛に、自分を重ねているところが面白い。

3位「そこは過去」小野みち子3点

背の皮と同化している敷き布団

「同化している」はふんわり体になじんでいるのか。若しくは痩せているのかいずれにせよ、「同化」で作者の心地良さが表れている。

4位「塩むすび」白土正江　2点

八月の父いつもより気難し

無花果やおんなにやどる別の貌

5位「ねぎぼうず」石橋紀公子1点

夏蝶が黄泉へ誘う石舞台

寒垢離に僧の拳の硬くなり

心象表現の措辞が的確　伊藤　利恵

一位「なまえ」赤峯友子　5点

ジグザグに麦秋を来る父の風

送り火や父をかえして後の熾

父恋の二句。「ジグザグ」「熾」と心象表現の措辞が的確で、纏いつきがちな湿度を上手に抑えています。

他に、

天牛が夢の途中を横切れり

じゃんけんで負けた蛍がついて来る

など、個性的な句を並べ巧な導入部です。ただ、中盤で「八月の烏の背中泣いている」「煙突の夏空われに落ちて来る」「逝く空を毀さぬように青栗蹴る」など動詞の結句が続き、全編の流れがしばし単調になってしまったようです。主観に寄った表現は好みの別れるところでしょうか。しかしながら、以降の作品には見るべきものが多くありました。

風邪に寝て前頭葉の海鳴りす

菜の花の群れて恐るるもののなし

一句目の熱の身の臨場感、菜の花の句の、昂ぶりの表現の衒いの無さなど、対象を捉える力強さは、この作者の魅力のひとつと思います。

たんぽぽの絮の行方はぽるとがる

此花咲耶姫が舞い降りてより青田

名を呼ばれわが名が好きになる小春

自在な詩のこころの在り様に、共感する読み手も多いでしょう。

加えて締めにこの三句を置いた事で、一編に余情が生まれました。季節の巡りに拘らず、言葉同士の響き合いを大事にした作品配置も評価したいです。

二位「そこは過去」小野みち子4点

姉が来て時雨の中に立っている

冬の旅ふるさとに似た駅に着く

次の世も父は猟師でいるらしい

風鈴が止まり夫が来る気配

段々と遠のいてゆく秋の耳

山茶花の垣根超えたらそこは過去

「姉」も「父」も「夫」も皆、死者でしょうか。細かく揺れる時間軸が特徴の、「俳句版雨月物語」とでも呼びたくなる興味深い一編でした。特に「山茶花」の句は、「時間」という人間が産み出した概念に対して「果たしてそうかしら？」と、柔らかく異を唱えるような、感覚に思想が添うような、面白い句の成り立ちでした。他に、

万緑のまん中にいる意気地なし

こんな日はぱぱっと作るあっぱっぱ

など、目を引く作品が並びます。

「背の皮と同化している敷き布団」という川柳的な句を冒頭に置いたことを、減点材料としましたが、作者は、すでに多彩な表現方法を身に付けておられる人のようで、今後の作句活動がたいへん楽しみなおひとりです。

三位「独り居」川西達子　3点

目が合って膝を汚して蕗の薹
早春、蕗の薹に出会った喜びは、まさに「目が合って」です。自分が見つけたというより「蕗の薹」に見つけられたような気持ち。衣服の汚れへの頓着より、まずは香りに浸りたい……。その心弾みが伝わってくる作品です。

柚子湯する独りに余るゆず抱いて
翼より詩聴く耳を花辛夷
夏柑と未だ少年の置手紙
映像が良く見えて、感情移入のし易い作品です。「一人を慎む」ということばがありますが、一遍全体から、「独り居」を丁寧に過ごしておられるだろう作者像が浮かび、好感が持てました。

ビル育つ秋暑の街の野心かな
注目した一句です。「ビル育つ」とは大胆で且つこころ踊る措辞です。無機質なビルに血や感情があるが如く思わせます。そこに「野心」と畳みかけ、有無を言わせません。低い音色の一編の中にあって異彩を放ち、読み手を楽しませます。

四位「隠し上手」本田圭子　2点

春昼を母につながれ黒電話
例えば、たまたま帰った実家での光景でしょうか。昭和を代表するフォルムの「黒電話」の、声を伝え合うにはちょうど良い重さの受話器。不在の母の存在感がクローズアップされます。季語の「春昼」もところを得ています。

秋天に象のテントをピンと張る
心象でしょうか。「象のテント」というノスタルジーに「ピンと張る」という意志をぶつけたところが面白いです。「天」「テント」「ピンと」と、同音を重ねたリズム感も良いです。一編を通じ、よく整った作品が並んでいるのですが、類想のありそうな句が散見されたところを減点としました。先に挙げた素晴らしい句を作る力をお持ちなので、今後に期待したいです。

五位「冬薔薇」神　慶子　1点

鳥渡る母の着物を手放せば
美しい句です。衣桁に架けられた着物と、羽を広げた鳥のイメージが重なります。そこに「手放せば」の措辞が加わることで、手を離れた着物が次第に鳥の姿に代わってゆく映像へと広がってゆきます。遺品の整理からの着想と思いますが、「日常」は詩の宝庫ですね。

どの家も春が来ていて忙しい
牛は賭場へ夏うぐいすのよく鳴く日
などにも注目しました。減点材料としては、「帰り道ふっと淋しくなって春」「淋しさのその先にある桃の花」「満たされているから淋し夏の月」と、一編の中に「淋しい」という語が三回出てくることを挙げます。形容詞はだいたいにおいて句を弱くする作用がありますので、使い方には工夫が要るようです。

選外の作品について感想を述べます。

「塩むすび」
一つきりの乳房よ乳房は暖炉
おのが乳房への呼びかけの哀切さと「乳房は暖炉」と言い切る自愛が胸を打ちます。

秋没日大工の父が寄るファミマ
ペーソスのある良い句と思います。

「星月夜」
朝涼や音立ててとく卵二個
秋まつり騒めきだけを持ち帰る
一句目は季語の働きが十分に生きた作品と思います。「音立ててとく卵二個」の朝の動作を特別なものにしています。二句目、少し抑えた心情吐露が、読み手の気持ちに添ってきます。

「京都」
叙景に徹した句の多い一編で、清涼感があります。その中で、
終戦日軒をめぐりて老のこゑ
静かな町あぢさゐの艶に添ふ
など、作者の息遣いの偲ばれる作品の方に私はより惹かれました。

「ねぎぼうず」
ふり返るための坂道葛の花
眠る森毀さぬように木の実降る
表現したいことがたくさんお有りになるのだろうなと思いつつ拝読。その中の何処を抽出すれば読み手に届くのだろうか、と迷いの中におられるような一編でした。正解はすぐに見つからないでしょうが、ここに挙げた二句を成した時の作業工程を振り返るのも一つの方法と思います。

「道程」
木の実落つバンホーテンの蓋開ける

すこし肌寒さを感じるころの暖かな飲み物……、こう書いてしまうと平凡ですが、そこをきっちり俳句作品にならしめているのは「バンホーテンの蓋開ける」だと思いました。

「まるい汽笛」

一句の中に思いがたくさん詰まっている作品が多く、少し窮屈な感じを受けました。

秋空をまるい汽笛が抜けてゆく

この句のように、汽笛に焦点を当て、できるだけ余白をとるようにすると、読み手に届き易いと思います。

「青柿」

シェパードがいきなり走る春の園

花々の息吹に、シェパードもじっとしていられなかったのでしょう。「いきなり」が良いです。

「日々是好日」

咳止むは御祖(みおや)が我を哀みて

「みおや」ということばを久しぶりに見ました。

代々の田畑を守りながらの日常詠、あるいは今後、思いがけない素材を見つけるかもしれません。

「回想」

九回もオペ耐え生きし喜寿の春

手術を伴うご病気というだけで、そのご苦労を思いますが、九回となると、言葉もありません。けれど、作品はなべて好日的で、お心のすこぶる健康的なことが伺われました。

今回は十四作品の応募で、選をするにはちょうど良い分量でした。皆さまのお作品ひとつひとつを味わうことができました。新しい個性が育っているようで、楽しみです。

三重町狩野句会 年間賞を表彰

4月20日(日)総会のあと定例句会も

18名の参加があり、全員で松花堂弁当を食べました

4月20日（日）、豊後大野市中央公民館で三重町狩野句会の年間賞の表彰式がありました。年間賞の表彰は平成三十年に始まり、今回で七回目。以下に示した12句が表彰され、賞状と記念品が授与されました。

表彰式の後は総会を開催。前回の総会以後に入会した会員が8名もいるため、規約全文と、会長が上田たかしさん、事務局長が佐藤哲夫さんであることを確認しました。

このあと全員で松花堂弁当を食べながら歓談。午後からは事前投句7句出しの定例句会が開催され、互選で10点を獲得した赤嶺広史さんの「つつじ咲き父は施設の人となる」が最高得点句になりました。

【狩野句会年間賞受賞作品】

上田たかし年間大賞《1句》
みかんむく女は嘘が好きだねえ
（佐藤　珠幸）

年間最優秀賞《1句》
生コンに八月の陽を叩き込む
（赤嶺　広史）

年間優秀賞《2句》
しまり屋の妻に目刺を焦がす癖
（足立　町子）

春霞まっすぐ行けば黄泉の国
（吉田　素子）

年間秀逸賞《3句》
秋日和今日も予定はありません
（鎌倉真由美）

春寒や診察室の丸い椅子
（岡村　君香）

午睡醒めたましいはまだ母の膝
（稲田久美子）

足立攝年間賞《3句》
カラカラと無人の家に風車
（衛藤　俊一）

手花火の短き光いもうとよ
（原尻　里子）

片手ずつ手袋はめた帰り道
（森　ひとみ）

年間特別賞《2句》
音もなく霞勝手に来て消える
（児玉　利子）

箸落とし腕の重さを知る残暑
（赤嶺　信子）

《新会員紹介》

加藤知嘉子（大分）
都より持ち帰りたる春の風邪

衛藤　和（大分）
病みし身を窓に映して春近し

仲摩みや子（大分）
ラブレター開けば春の風になる

小田新一郎（佐伯）
静寂を切りさく弦音初射会

森﨑　洋子（佐伯）
改めて文読み返す春の月

《受賞》

天籟通信 第4回「穴井大賞」

小野みち子

句会探訪⑰

子鹿句会

子鹿句会を取りあげるのは会報127号以来2回目。この間会員も2名増え9人体制に。全員が協会員である。また会員の多くが天籟通信の会員であり、毎月自選句に投句するのでそれに合わせて定例句会では一人6句出しにしている。

子鹿句会が誕生したのは平成27年で、富士見が丘公民館の短歌教室と同時に開講した。それまでまったく俳句経験のないものが集まっての教室だった。名前の由来は、当時の会場が富士見が丘公民館の「小鹿の間」だったから。人数が増えて今は「由布の間」に移ったが、以前の名前をそのまま使っている。講師は第一回目から足立が担当している。最初は大分現俳協の役員ではなかったため、指導に時間をかけることができた。

この教室の特徴は、いわゆるお楽しみの公民会俳句ではなく、最初から本格俳句を志向しているところ。過去のお約束事にとらわれず、詩情をどう表現するかに力点を置いた。すでに協会賞1名、準賞3名を輩出している。

《発展基金協力者》

※一口千円で常時受付中

・甲斐　伸子……一口
・匿名希望……三口
・溝部　文夫……三口
・大神　愛子……三口
・赤峰佐代子……三口
・有村　王志……三口
・安藤　セツ……一口
・井上　則子……二口
・上田たかし……三口
・小野みち子……一口
・甲斐加代子……三口
・甲斐　素純……三口
・加藤　征孝……三口
・鎌倉真由美……三口
・古後　粒勝……三口
・神　慶子……一口
・幸谷　恵子……三口

（続きは次号）

第一回雑詠句会 ＝作品募集＝

◇会員なら誰でも参加できます。当協会の日常活動なので無料。
◇当季雑詠で、当勉強会に未発表のものを3句送ってください。
◇締切は六月二十日（金）。自薦作品の選句締切と同じです。
◇同封のFAX用紙を利用して、お近くのコンビニから送れば便利です。50円で送れます。
◇ハガキ、メール等でお送りくださってもかまいません。読めさえすれば方法は問いません。
◇宛先は事務局足立まで。
◇作品は自動的に年間一句賞の対象になります。
◇詳しくは句会報27号を。

令和七年四月二十五日発行
会報第百三十三号
発行人・有村　王志
発行所・大分県現代俳句協会
編集人・足立　攝

大分県現代俳句協会
OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION
会長　有村王志
《事務局》
〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436
足立　攝方
TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481
URL:http://gendaihaiku.net
E-Mail: info@gendaihaiku.net